

実践報告

町民とともにつくるジオパークの学習会

－下仁田の魅力探しフォーラムの3年間の取り組み－

Learning sessions on creating a geopark together with townspeople
 – Three-year initiatives of the Shimonita Charm Discovery Forum –

中村由克^{*1}・森川恵美子^{*2}・ジオパーク下仁田協議会ガイド部会^{*3}

Yoshikatsu Nakamura, Emiko Morikawa and Guide Section, Geopark Shimonita Council

はじめに

下仁田町全域をエリアとする下仁田ジオパークは、2021年に行われた再認定審査で、「地質資源以外の活用：生態系や無形文化遺産についての専門家との協力体制が必要」という改善指摘を受けた。それを受けて、ジオパーク下仁田協議会のなかの会議で今後の対応策を相談し、ガイドの方より「生態系や無形文化遺産についての勉強をしたい」という要望が多く出された。ガイド部会では、それを実現す

る方法を相談する中で、遠くから先生を呼ぶのでなくて、この地域で各分野の実践されている方がたに話題提供者になってもらい、その方のお話をもとに参加者相互で討論するような会にしようという方向性が確認された。

2023（平成5）年10月から第2金曜日の夜2時間の予定で講座を実施することになった。そして、次の再認定審査がある2025年までの3年間にフォーラムを実施することになった（第1表）。

第1表

No.	年月日	テーマ	所属	氏名	参加者
1	2023年(R5)10月13日(金)	下仁田の野生生物の現状	下仁田町猟友会	岩井 実氏	19名
2	2023年(R5)11月10日(金)	自然環境から見た西毛・下仁田の特徴と魅力	元群馬県立自然史博物館学芸課長 下仁田町教育長	里見 立夫氏	22名
3	2023年(R5)12月8日(金)	時代とともに振り返る諏訪神社秋季例大祭の歴史	下町祭典委員会 副若頭	高橋 友一氏	68名
4	2024年(R6)11月8日(金)	東西の文化とモノの交差点	下仁田ジオパークの会 会長	大河原順次郎氏	18名
5	2024年(R6)12月13日(金)	西上州の山岳信仰	常光寺 住職	堀越 教之氏	30名
6	2025年(R7)1月10日(金)	森と歩く	環境省森林セラピスト	中村 成孝氏	15名
7	2025年(R7)6月13日(金)	下仁田音頭について	裕仁会 日本舞踊	高橋 敏博氏	23名
8	2025年(R7)7月11日(金)	川魚について	上州漁業協同組合 副組合長	今井 重雄氏	12名
9	2025年(R7)9月20日(土)	まちなかで森林浴	環境省森林セラピスト	中村 成孝氏	12名

2026年2月12日受付。2026年2月24日受理。

*1 下仁田自然学校 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1 下仁田自然史館内 (naka530731@gmail.com)

*2 下仁田ジオの会 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1 下仁田自然史館内

Shimonita Museum of Natural History, 158-1 Aokura, Shimonita-machi, Kanra-gun, Gunma, 370-2611 Japan

*3 ガイド部会員：大河原順次郎、森川恵美子、神戸百合子、高橋敏博、高橋真理子、黒沢雅史、堀口和利、松原信也、横田孝三、津金沢英美、中村由克、神戸進一、関谷友彦

下仁田の魅力探しフォーラム

下仁田の魅力探しフォーラムは、2023年度が10月、11月、12月の3回、2024年度が11月、12月、2025年1月の3回、2025年度が6月、7月、9月の3回、合計9回行った。1回目から8回目までは、下仁田町公民館や文化会館の会議室等を会場とし、毎回15～30人程度の参加者があった。第3回の諏訪神社例大祭と第7回の下仁田音頭に関連した回では、お祭りや盆踊りに関連した関係者も含めて、多数の参加者を得た。最後の9回目は、午前中に野外で“街中での森林浴体験”を行った。詳細は、巻末の資料「フォーラム記録集」を参考にされたい。

実施した成果

1 講師の選定、身近なテーマ、身近な講師の学習会

全9回、8人の講師は、1年分ごとに前年度のガイド部会の会議で相談し、下仁田ジオパークエリア内の生態系と無形文化遺産に関連して実践されている方やテーマについて候補を出し合った。その結果、協議会事務局を構成する役場のジオパーク推進係、下仁田町自然史館職員だけでは把握できていなかった多彩な経験、分野の人びとの情報を集約することができた。

大学などの専門家による一般論で終わるのでなく、一番身近な下仁田町内外の現状や課題を学ぶいい機会となった。講師の方も、ジオパークの会合にはじめて関わるという方も何人かいて、その方が所属する団体やグループ、分野の方がたの参加があり、町民にはあまり知られていない多彩な経験を披露していただいた。その結果、この地域にある各種分野の埋もれた資産、魅力についての新たな認識を共有することができた。

各回では、講師の講演後、質問が多数寄せられて、それに答えるという形でフォーラムは進められた。質問と討議によって、話題提供していただいた内容がより具体的に把握でき、また、それ以外の課題、話題にも注意が向けられるきっかけとなった。9回のフォーラムを通して、野生生物に関連しては

近年この地域で問題化しているヤマビルについての課題、神社のお祭りについては地域全体の高齢化や少子化の課題、山岳信仰に由来する山頂などに残される石造物の保存に関する課題、盆踊りなどの伝統文化をいかに継承するか、川の環境をいかに保っていくかなど、ジオパークの枠だけにとどまらない、地域全体の課題が浮き彫りになった。

また、このフォーラムで明確になったことは、下仁田地域のお祭りや盆踊りが決して古くからあったものではなく、江戸、明治、大正、昭和など、それぞれの時代に発展してきた街づくりと関連して、整備、充実してきたものだという、「自分たちの街づくりの歴史を具体的に体現したもの」ということを把握できたことである。文化財としては古代や中世からの歴史を有するものに価値があるように思われるが、それほど古いものではないとはいえ、近世以降の街道筋、谷口集落としての町の発展の歴史を象徴するものだということが理解された。下仁田町のように、特別に古い歴史を持たない、あるいは記録が残っていない地域や市町村は、全国各地の町と共通する特徴だと思われる。このような、自分たちの祖先が作り続けてきた地域の歴史を、住民が学び、その意義を自覚することは、とても意義深いことだと思われる。

2 ジオパーク活動の活性化

下仁田地域の地質研究は、日本地質学の黎明期、1879（明治12）年に東京帝国大学地質学科の第1期生小藤文次郎氏が卒論研究で下仁田町から埼玉県長瀨町にかけての地質調査を行ったことに端を発する（保科ほか 2017）。そして、東京理科大学の藤本義治氏がヨーロッパの押し被せ構造にヒントをえてナップ仮説をたて、弟子の沢秀生氏が同大学の修士論文にまとめた。下仁田地域には、このような古くからの地質研究史をもち、東北日本から西南日本の各地、各種の地質要素に繋がる地質体が狭いエリアに集中して分布する。このような恵まれた地質条件がありながら、ジオパーク活動を支えるのは、人口約6000人弱の1町だけである。

下仁田町ジオパークでは、下仁田町自然史館や下

仁田自然学校のメンバーにより、豊富な地質資源を活用した研究、教育普及の活動や展示が行われてきたが、生態系や無形文化遺産についてはあまり手が出せなかった。このような状況の中で、町内の多くの方がたの創意工夫で、それぞれの分野の活動や現状を知ることができ、下仁田ジオパークとしては新しい分野の活動を実施することが可能となった。

そして、2025年秋に行われたジオパークの再認定審査において、従来不十分だったこれらの部門についても、自己評価をあげることができた。この方向性は、2026年以降にも発展させていく見通しができたことは大きな収穫であった。

町民向け学習会を企画・運営した感想

ジオパークは地域にあるものを活かし持続可能な社会、大地、地域、生態、そして大切な人の歩み等について、楽しみながら学ぶプログラムである。それは、自然資源を守りながら社会を発展させることや、地域の貴重な自然・文化を学び、地球と人間の繋がりを知り、地域の地形地質、自然、文化遺産を守ることが目的である。2007年日本ジオパーク連絡協議会が設立され、2011年下仁田ジオパークは日本ジオパークに認定された。しかしながら、ジオパークの言葉の認知度は国民全体の60%と言われている。

筆者の1人、森川は町内で商店を経営する傍ら、2011年の下仁田ジオパークの認定時からジオパーク活動に参加し、認定ガイドを務めている。このフォーラムの企画・運営は、2021年に行われた再認定審査での改善指摘を受けたことが根底にあるが、ジオパークをもっと身近に感じてほしいという熱い思いがあった。さらに、講師はジオパークに初めて関わる方にも焦点を当て、その方が所属する団体やグループ、分野の方がたが初めて参加するきっかけになればという思いもあった。

それは、地質から暮らしへ視点を転換することでもあり、地質学用語ではなく、地域の歴史、産業、食材など、日常の風景と大地の繋がりをどう見せるかが重要だった。さらに、テーマは親しみやすいものと設定した。これは、ジオパークが難しい、硬い

というイメージを払拭し、参加者が楽しいと感じられるように注力した。座学からスタートし、回を重ねる毎に参加型や体験型を取り入れた。

毎回のフォーラムでは、講師の方がたが予想以上に意欲的に取り組んでいただき、それを拝聴し、体験した参加者が「地元の見方が変わった」「地元で誇りを感じた」といった声も聞いた。ある講師は、その後、小学生ほかを対象とした講演に携わるきっかけになった。参加いただいた方がたが、ジオパーク関係の講座には初めて参加した方や、若い方、女性が増えたことは成果となった。さらに、参加者が単なる受講者ではなく、次の担い手になる可能性も感じた。

今後もジオパーク活動と地域産業・町民の結びつきを強化し、ボトムアップ（住民主導）の活動を継続・発展させていくよう努めるとともに、ジオパーク活動を「保護・保全」「教育・普及」「地域振興」の3本柱で進化させていくことが、下仁田ジオパークの持続的発展につながるものと思う。

さらなる課題

3年間のフォーラムは当初の想定以上の盛り上がりがあり、多くの町民の理解を得た。しかし、今後、さらなる発展を目指すためには、講座だけでなくジオパーク活動でも、乗り越える課題がいくつか残されている。それらの一部を列挙したい。

- 1) 住民向け講座のほかに、行政向け講座の開催も必要と思われる。この先、住民と行政が連携しないと、この次の展望が立ち行かないと危惧される。給食センターは、ジオパークメニューを考案し給食に取り入れ、ジオパークの日を意識していただいている。このような意識、取り組みが全庁的に動き出すことが望まれる。
- 2) ジオパークは、担当係だけで行うのではなく、町役場の各課への連携に足を使い、熱意をもってあたってこそ、持続可能な日本ジオパークとなると思う。ジオパークは全国区存在であるので、下仁田特産の下仁田葱、蒟蒻、神津牧場製品などジオパークを絡めて宣伝し売り出すこ

と、県外に下仁田を売り出すことが求められる。そのために、農林や商工観光などの課とも連携が求められる。現状のジオパーク認定商品は数が増えているが、メリットが少ない。また、下仁田町を応援してくれるふるさと納税で「下仁田ジオパークの為に」との用途をより有効活用できるよう、担当課との連携や意見交換が求められる。

- 3) 下仁田は、古来より四方からの道が集まる場所（谷口集落）として発展してきた歴史がある（ジオパーク下仁田協議会ほか2022）。それゆえに、下仁田ジオパークの範囲は下仁田町域に限定されるが、近隣市町村も巻き込んで、下仁田

ジオパークの魅力を発信していくことが、日本ジオパーク「下仁田ジオパーク」の課題だと考えられる。

引用文献

- ジオパーク下仁田協議会テーマストーリー検討委員会・ガイド部会（2022）下仁田の大地 3つの魅力カーボトムアップでつくったジオパークの新テーマとストーリー。下仁田町自然史館研究報告，7，65-68.
- 保科 裕・関東山地研究グループ（2017）群馬県下仁田町周辺における「跡倉ナツ」の研究史と論点。下仁田町自然史館研究報告，2，33-45.

（要 旨）

町民とともにつくるジオパークの学習会－下仁田の魅力探しフォーラムの3年間の取り組み－（2026）中村由克・森川恵美子・ジオパーク下仁田協議会ガイド部会。下仁田町自然史館研究報告，11，61-70.

下仁田ジオパークは2021年の再認定審査で、生態系や無形文化遺産についての改善指摘を受けた。それを受けた対策として、2023年から2025年までの3年間に9回の「下仁田の魅力探しフォーラム」を実施した。主に町内で関係されている方を講師に、身近なテーマで討論する連続講演会を実施した。その結果、講師、参加者ともにジオパークに初めて関わった方が大勢いて、下仁田ジオパークとして新しい活動を展開することができた。

下仁田ジオパーク下仁田の魅力探しフォーラム・第1期～第3期（2023～2025）記録集

編集：ジオパーク下仁田協議会事務局

【1】岩井 実(下仁田猟友会)「下仁田町の野生生物の現状」

2023（令和5）年10月13日（金） 19：00～21：00

1 下仁田町の動物

下仁田町に生息する動物は？

ツキノワグマ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル 中小坂、東野牧に2群あり、母系家族でおばあちゃん中心の群れ。オスは単独行動で、違う群れをさがして旅に出る。おばあちゃんを駆除すると、群れが分裂するのでよくない。

ニホンカモシカ 角は一生もの。角は10 cm以内で、1年ごとに年輪がある。日本固有種。これらのなかで、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザルはもともと下仁田にはいなかった種といわれ、山林の不管理や荒廃農地の拡大とともに増えてきたと思われます。

小型獣 アナグマ、キツネ、ホンドタヌキ、ホンドテン、そのほかネズミ、モグラなど。外来種のハクビシン、アライグマも見かけます。

2 下仁田町で起きている事

農作物では、イノシシの掘り起こし、サルの食害、アライグマのかぼちゃの穴などが見られます。被害額は町全体で1800万円ほどになっています。林作物では、シカによる樹皮の食害、草地の裸地化などが目立ちます。また、家への被害としては、アライグマやハクビシンの家への侵入があり、本来は空き家に入ることが主だったが、最近では高齢者の住宅内に侵入する事案も増えてきて問題になっています。

3 対策は？ どうしたら防げるの！

対策1は「守ること」。農地への防除として電気柵やフェンスをはったり、林地へ杭と防獣ネットをはるなど。対策2は、「攻めること」。罠による捕獲、檻による捕獲。シカは年600～1000頭とっています。

問題は、お金がかかることと、高齢化による猟友会の会員が減っていることで、なんとか維持していくことが課題です。どうするか？ まずは、自分たちでできることとして、家のまわりに食べ物を置かないこと、家の通気口に網を張ることなど気を付けて、人間のいる所は動物のいづらい場所にしておくことが大切です。

4 ジオパークとして、「フィールドで動物を感じよう」

地域の資源がジオパークの基本。下仁田では、天然の動物が資源となります。見学者のガイドでは、「動物を感じる」がスパイスになります。いた証拠を見つけてみよう。山の中や河川には足跡や獣道があり、イノシシが掘った跡、シカの食痕、木の実の食痕（穴）、はっばの食痕など、動物の生活痕があります。何が来ていたのか？、なぜそこに来たの

か、考えて、ガイドの際に少し足すだけで、おもしろい解説になり、ジオパークはより魅力的になります。

【2】里見立夫（下仁田町教育長・元群馬県立自然史博物館学芸課長）「自然環境から見た西毛・下仁田の特徴と魅力」

2023（令和5）年11月10日（金） 19：00～21：00

1 全体としてみること

現在見られる地形や自然環境は、地球の歴史の中で形作られたものです。また、地形だけでなく気候等で自然環境は変化します。地質や生物等の詳しい話はこの後のフォーラムの中でそれぞれの方が話をしてくれると思いますが、下仁田町の地形や自然環境を概観してみます。

108年前、ドイツの気象学者アルフレート・ウェゲナーは大陸と海洋の起源を考え、イギリスのアーサー・ホームズは、地球内部の熱による対流が大陸を移動させたと言いました。第2次大戦後にソナーによる海底探査が行われ、地磁気の変化などからプレートテクトニクス、さらにはスーパーブルーームなどの説が出ました。このプレートが移動する過程で日本列島が作られました。下仁田で見られる付加体などの概念は、大陸移動から明らかになってきました。クリッペの動きも問題になっています。

物事を見る場合に、相対的に考えること、点としてみるだけでなく全体のことを見るのが重要で、ジオサイトを観察する時、その状態を詳しく見るだけでなく、他地域とのつながりや、その地形等の成因に関心を持つことで見方が変わってきます。物を見たり想像したりする時に、認知スタイルがあります。巨視的な見方と微視的な見方、「場」依存的な見方と「場」独立的な見方などがあります。また、時間や空間の単位や数字の理解などができると、理解が深まりやすい。時間を例にすると、小中学生の子どもたちは100年という長さが理解できる時間の長さだという研究結果があります。おじいさんやおばあさんの年齢にあたり、それより長い時間は、イメージがわきにくい。子どもの感覚では、マンモスと恐竜の生存していた年代が同じと捉えがちです。

2 生物と環境

ジオサイトはその場だけでなく、広く見ることが大切です。生物は、地質、地形、気象などの環境から影響を受けます。これらの関係を考えるのが生態学です。地質と植物の関係がよく知られているソハヤキ要素があります。ソハヤキとは南九州、四国、紀伊半島のそれぞれの古い呼び名から来ている説で、中央構造線の南側では温暖多湿な常緑広葉樹が特

徴で、共通の植物が生息しています。フォッサマグナ要素の植物は、糸魚川ー静岡構造線の東側にあり、かつては海没した地域が火山活動に伴って堆積した地域で、その環境に適応してきた植物です。また、石灰岩要素は、石灰岩質の地質に生息する植物で、アルカリに強い植物です。下仁田はその全ての要素が混じり合っている地域です。

3 下仁田の地形と気象

下仁田は関東平野と山地帯の接点で、南に関東山地、北西に長野の高い山があり、東に開けた地形です。

下仁田町の気象は、西牧のアメダスデータの月平均気温で見ると、7、8月に27℃、1月には0℃を下らなくて、高温ではなく季節がはっきり分かれています。春先は日較差が大きく、秋口は地面が冷えて放射霧が発生します。降水量は300mm/月で多くはありません。

冬には冬型気圧配置で北西風が強いが、雪が降ることはありません。しかし春先には、沿岸低気圧が関東地方の南海上を通過する時に大雪になることがあります。夏は、太平洋高気圧が発達し南からの熱気を吹くんだ風が吹き、海に近い地域は海風の影響で暑さの上昇は抑えられますが、南に開けて三方を山に囲まれている下仁田のような内陸は、熱がたまりやすくて暑くなります。特に近年は温暖化の影響で以前とは異なった季節の変化が見られ、夏の暑さは厳しくなってきました。

4 蘚苔類を例にして

コスギゴケはよく見られますが、山の日当たりのよいところでも見られます。胞子体の上部で胞子が育つ蒴は、糸で編んだような帽子で包まれています。ネズミノオゴケは湿った岩の側面などに見られます。茎を囲むように生えている葉が丸く重なり、ネズミのしっぽのような形に見えます。ネズミノオゴケが見られる崖のところには、エビのしっぽのような形のエビゴケが生育しているところがあります。

西野牧の西牧川の水辺でチャツボミゴケが生育しています。チャツボミゴケは強酸性に強い蘚苔類で、火山性の水域に見られます。西野牧の群生は鉾山の廃鉾から流れる水辺に見られます。水の中に見られる蘚苔類でホソホウオウゴケは茎から生える葉が羽根のように見える蘚苔類です。石灰岩地帯に特有に見られる種で、下仁田では四ツ又山の麓などの流れのある場所で見られます。イチヨウウキゴケは水の上に浮いている蘚苔類で、田んぼやため池などで見られます。下仁田では水田がなくなってきたので見つけることが難しくなってきました。西牧や小坂でも見つけたことがありましたが、富岡の南蛇井では見ることができます。

5 動物を例にして

ツマグロヒョウモンはピオラやパンジーを食草とするチョウで、昭和の頃は見られませんでした。平成7年に私は初めて観察しましたが、今では町内に普通に生息しています。本

州に8種類いるヘビの中でシロマダラは日本固有種です。夜行性で低山地の林の中などに生息しています。夜行性で昼間見ることがないので、幻のヘビともいわれています。毒はありません。ジョウビタキは冬に見られる渡り鳥です。オスは頭が灰色で目の周りが黒いが、メスは頭が淡い褐色です。翼に白い斑点があるのでモンツキドリともいわれています。下仁田では11月から3月頃にかけて見ることができます。

自然は常に変化しています。今までいたものが突然いなくなったり、今まで見られなかったものが、いつの間にか普通に見られるようになることがあります。関心を持って周りを見てみるのが大切。県博ではJSTの補助金で、仙台市と一緒に仙台市と群馬県内の身近な生物の記録をとったことがあります。100mメッシュで、どのようなタンポポを見たかなどを記録して、生物多様性の調査に活用しました。大規模な調査でなくても、季節の変化を聴覚、視覚、触覚、味覚など五感を働かせ、ツバメがいつ来たか、セミの鳴き声をいつ聴いたかなどを調べ、年毎の記録で早くなったか、遅くなったかなど、自然をよく見るようになると楽しくなります。初夏になると、ホトトギスのさえずりを聴くことができますが、同じ時期に聞こえていたカッコウは、10年くらい前から聴くことができなくなりました。

6 自然環境をどのように守るか

世界の年平均気温は、1890年から2020年の間に右肩上がりであり、気象庁が岩手県の綾里、南鳥島、与那国島の三カ所で、人々の日常生活の影響が少ない地域で観測していますが、そのデータからも二酸化炭素の濃度は右肩上がりです。

日本の人口は、縄文時代に27万人、中世に700万人から800万人、江戸時代に人口が増えましたが、明治時代になって医療が発達し、国民の栄養が豊かになってきて、人口は急上昇しました。その人口も2004年がピークで、その後、急に減っています。人間の生活は自然環境に大きな影響を与えています。自然環境をどのように守るか、人間生活と自然の接点をどう維持していくかが、自然環境だけでなく人間生活をどのように維持していくかが問題になります。近年、人口が減ってきている中で大きな負担になってきていて、これからの問題です。

質問・討議：「下仁田に来て、夜あまり昆虫を見ることができない」「不耕作地が増えている」「野生動物が増えている」などの自然の変化についての議論が盛り上がりました。

【3】高橋友一（下町区祭典委員会副若頭）「時代とともに振り返る諏訪神社秋季例大祭の歴史」

2023（令和5）年12月8日（金） 19：00～21：00

1 神社とお祭りのはじまり

諏訪神社は、武田氏が西上州に進出し八幡神社を諏訪神社と変更したのが始まりとされ、天正年代（1573～93年）のこ

とと考えられます。町重要文化財になっている神社本殿がつくられたのは、1837（天保8）年から1846（弘化3）年で、諏訪出身の大工棟梁・矢崎善司昭方によるものでした。1841（天保12）年には、江戸の職人によって神輿がつくられ、この頃からお祭りが始まったと考えられます。

2 各地区のお祭りへの取り組み

1889（明治22）年には、下仁田町、吉崎村、川井村、栗山村が合併し、現在の祭り参加集落が下仁田町となりました。1906（明治39）年には、町内最初の山車が仲町地区に完成。1932（昭和7）年には、現存する山車では最も古い東町地区のものができ、1935（昭和10）年に旭町の山車ができました。さらに、1937（昭和12）年には、東町が日本武尊の人形を制作。

1950（昭和25）年に下町が山車、1955（昭和30）年に旭町が静御前の人形、1958（昭和33）年に上町が山車と鏡獅子の人形、川井が山車を制作、1961（昭和36）年に仲町が2代目山車、さらに1975（昭和50）年に下町が素戔嗚尊すさのおのみことの人形を制作しました。1979（昭和54）年には、諏訪神社の彫刻が町重要文化財に、大ケヤキが町天然記念物に指定されました。

1991（平成3）年に神輿の修理を行い、神輿の製作年が150年前と判明しました。吉崎は、2003（平成15）年に山車、翌年に菅原道真の人形を製作。

3 お祭りを続けていくために

下仁田町の人口は、昭和30年に21,794人だったのが、令和5年には6,549人になりました。お祭りに参加する子供も令和5年には96人となっていて、後継者養成が課題となっています。いかにお祭りの魅力を伝承するか、氏子以外のお祭りへの参加など、地域住民の理解と協力が求められています。諏訪神社秋季例大祭は、町とともに発展してきて、その時々々の住民が作り上げてきたものです。

最後の質疑では、参加者より、「前に町外の子供たちが神輿の綱を引くのに参加させていただいたことがいい思い出になっている」「舞方が女性なのは珍しいのではないかな」など多くの話題が尽きませんでした。

【4】大河原順次郎（下仁田ジオパークの会会長）「東西の文化とモノの交差点」

2024（令和6）年11月8日（金） 19：00～21：00

1 商圈を上げた中山道脇往還「下仁田道」と「峠道」

下仁田は海から最も遠いジオパークです。利根川水系・鑓川の最上流部の町であり、特産物の集散地となりました。地形・地質が文化も作ります。1807（文化6）年に伊能忠敬が測量で通った時の記録が残っています。信州追分から和美峠で下仁田に入り、信州道、甲州道、下仁田道に分かれる分岐点の下仁田で、小坂峠道（下仁田道）を経由し南蛇井に抜けました。

2 谷口集落とは

山間部と平野部の接点にできた集落。山と里のモノの交換場所で、定期的に市が開かれました。市の立つところは、加工業地でもあります。下仁田では毎月9日、本宿では毎月6日の市が立っていました。関東山地の周辺、現在の八高線沿いの鬼石、寄居、小川、生越、飯能、青梅、五日市は下仁田と同様な谷口集落が発達しました。また、足尾山地のふもとの桐生、大間なども同様です。

谷口集落は河岸段丘が発達するところが多いのですが、稲作不適地での知恵で養蚕、製糸、紙漉き、麦、蒟蒻製粉、石灰、木材などの産業が発展しました。うどんなどの食文化も発達しました。

3 紙漉き

群馬では東の桐生、大間々、西の多野、甘楽が盛んで、冬の副業として各地に広まりました。養蚕、製糸業が繁栄して儲かるようになると、紙漉きは衰退しました。多野・甘楽において紙の生産が盛んだったのは、南牧川流域と神流川流域が中心。南牧紙、青倉紙、多野紙などがあり、下仁田に集められて、下仁田紙として取引されました。下仁田は紙の集散地でもありました。

紙の消費は、中世までは畿内中心で、江戸時代になると江戸が中心になりました。関東は江戸が近いので、この近隣の紙は重宝されました。この地域の紙漉きが盛んになった理由の一つとして、江戸中期の全国的な問屋制家内工業の発展と紙漉きに使われる大量の水に石灰分が多く含まれる水質の良さが考えられます。

4 商圈を上げた峠道

下仁田には数多くの峠道が集まっていて、下仁田道、信州道、甲州道の分岐点になっています。稲作不適地だったため、米の買入れがあり、帰りの荷が必要でした。荷を積み替えることで労賃が稼げました。

最後には、番外編として、明治3年に製糸場候補地さがしで、プリユナらも根なし山を見たこと、鎌倉道を通じて南の秩父からの“太い道”が存在したことなども紹介された。

【5】堀越教之（常光寺住職）「西上州の山岳信仰」

2024（令和6）年12月13日（金） 19：00～21：00

1 西上州の山岳信仰の概要

山岳信仰とは、修行のために山に登る信仰で、日本にしかない信仰。西上州の山岳信仰は、普寛行者からの信仰で、最も古い石造物は行者が遷化して5年後の1806（文化3）年のものです。それ以降、1990（平成2）年頃まで、約190年間の信仰でした。

2 山岳信仰の歴史

仏教伝来以降では、奈良時代中期に神道・仏法に影響を受けて修験道が成立。修験道は、山岳は神霊が住む場所として

崇拜し、登山行為を修行とする宗教です。奈良後期には神仏混交の思想により、金剛藏王大権現が生まれました。役行者は山岳修行の開祖。この頃は貴族だけが山に登れた時代でした。平安時代には、最澄、空海の山岳仏法の提唱、鎌倉時代には、山岳信仰の地方的展開があり、各地の山に修験道が広がりました。

江戸時代になると、庶民講が誕生し、山岳信仰が民衆化しました。木曾御嶽山信仰は覚明行者、普寛行者によって天明・寛政（1780年代）に開山されました。

3 西上州の山岳信仰

普寛講御嶽教を中心にする、小沢岳、兄倉山、金剛萱、四ツ又山、秋葉山、時丸、日暮山、神成山をはじめ、上毛三山の妙義山（金鶏山）、榛名山（相馬山）、赤城山（鈴ヶ岳）にもみられます。

小沢岳：1809（文化6）年の創作で、下仁田地方で三番目に古い石造物。**兄倉山**：1806（文化3）年で、下仁田地方の普寛講で最も古い建立。**金剛萱**：1807（文化4）年で、下仁田地方で二番目に古い石造物。**四ツ又山**：明治以降のものが中心で、天狗を祀る西上州唯一の山。多くは南牧村を向いています。**秋葉山・仏岩山**：慶応年間以降の建立。**時丸**：かつて御嶽神社があり、明治9年の石燈籠があります。**日暮山**：すべて碑文のみの石造物4体。**妙義山（金鶏山）**：上毛三山は御嶽信仰より以前からの信仰の山。**神成山**：多くの石造物があります。幕末から明治のものが多いが、中には1765（明和2）年の石室や石仏もみられます。

4 まとめ

この地域の山岳信仰は江戸後期から大正期のものが多く、街道から見て美しい山が選ばれました。山岳信仰には古文書がなく、口伝に伝えられるのみで、造形にはあまりこだわっていないようです。多くの石造物は険しい山頂などにあり、忘れ去られ、風雪で壊れているものもみられます。文化財としてどのように残し、PRするかは課題です。

【6】中村成孝（環境省森林セラピスト）「森と歩く」

2024（令和6）年1月10日（金） 19：00～21：00

1 森をテーマに

下仁田の森林率は88%で、全国平均の67%よりも圧倒的に多い。町の木はスギ、花はサクラです。昔から杉材の生産地で、炭、木材を供出してきました。森林はCO₂を吸収し、O₂を出し、環境保全の役割があります。木材はCO₂の缶詰でもあります。父親は営林署に勤めていたので、子どもの頃から木曾（ヒノキ）、秋田（スギ）、青森（ヒバ）という三大美林を体験しました。勤務していたビール会社では、広島県庄原市でコルク材料となるアベマキの山の保護を行いました。

2 森林セラピー

国内では1982年から始まり、2004年に官民による森林セ

ラピー研究会が発足、2006年に木曾上松と群馬上野村にセラピロード基地が認定されました。上野村森林セラピーは、春夏秋に定期実施し、医師と歩く森林セラピー、東京からのバスツアー、県農林大学校の実地研修、他企業との連動など、多彩な形態で取り組まれていて、セラピロードは認定コースとして設定されています。

働き方改革、健康志向、ストレス・チェック検診、予防医学、健康年齢アップ、自然体験などと関連していて、気候変動にも森林セラピーは環境保全に適合します。触ったり、味覚や匂いなど、五感を通すことでストレスが解放され、心と体を休めることができます。癒し効果。

3 森林セラピーと歴史の相関関係

用水路を歩くこと、せせらぎの音は、歴史とも調和します。コンニャクやネギの味覚を通して大地の恵みを楽しめます。下仁田には他ではなくなってしまったものがいっぱいあります。ここにはまだ発掘されない魅力がいっぱいあります。日本の原風景が魅力。山も何層もあって、雲もきれい、星がすぐく見えて、空気がきれい、いつか思い出した時、いい宝物になり、日本の故郷のイメージがここにはあります。

4 今後の提案

レトロな街並み、赤レンガと下仁田駅、諏訪神社と中央構造線、天狗党の史跡、青岩とホテル山で森林浴など、身近な所からジオパークを知っていただけます。下仁田にだけで癒される、まさにセラピーの町です。下仁田は交通に恵まれており、転地効果で都会から100 kmほどの所にあり、多くの人たちが自然に触れることができます。

【7】高橋敏博（裕仁会・日本舞踊）「下仁田音頭について」

2025（令和7）年6月13日（金） 19：00～21：00

1 昭和中・後期に音頭と民謡が全国拡大

民謡ブームにより、地方民謡が全国区となったり、ご当地音頭が地域おこしとして作成されるなど、新しい流れが登場しました。そして、伝統のある中近世からの盆踊り、戦後までにつくられた東京音頭、炭坑節ほか、戦後に新たに加わった各種盆踊りなど、多種多様なものが併存する時代となりました。このような状況下で、下仁田音頭・こんにやく小唄もつくられ、盆踊りが盛んになりました。

2 下仁田音頭のあゆみ

1952（昭和27）年、高崎音頭が県内ご当地音頭の草分けとして完成。この2年後の1954（昭和29）年に、下仁田音頭が県内でも早い時期に完成しました。下仁田町商工会が主体となり、作詞を鈴木比呂志氏、作曲を八洲秀章氏、編曲：福田正氏、振付を榊原歸逸氏で、唄は水前寺清子氏・鎌田英一氏が担当し、6月に制作依頼して、8月11日には発表会という、きわめて迅速なスケジュールでした。

その後、前橋音頭1956（昭和31）年、桐生音頭1957（昭和

32)年、貫前音頭・一ノ宮小唄1967(昭和42)年、甘楽町音頭1969(昭和44)年など、各地の民謡が出来上がりました。

3 下仁田音頭・こんにゃく小唄の実演指導

会場で輪になり高橋さんのご指導で、参加者一同で音頭と小唄を教わり、夏の盆踊りには積極的に参加できるように実習に励みました。

【8】今井重雄(上州漁業協同組合副組合長)「川魚について」

2025(令和7)年7月11日(金) 19:00~21:00

1 下仁田の川はいい水

数年前、化粧品会社が関係した水質検査が実施された際に立ち合い、町内の河川水はものすごくいい水とのことを教わりました。

2 下仁田町のさかな

この地域には主に10種類の魚類が生息します。漁協では、放流事業等でアユが中心となっています。その他にも放流。漁協の役員は15名いて、全員がボランティアの仕事。入漁料は、魚の放流事業などの費用となっていて、今はぎりぎりの状態です。

イワナ：青倉川上流の平原、桑本などの山奥に生息していて、一切放流をしていません。30cmがせいぜいで、大きくなり、小さいのが多く、エサが少ないのか原因はわかっていません。天然イワナは骨酒がおいしいが、養殖では不適です。

ヤマメ：成魚放流をしています。天然のものはすばいこくて、すぐに隠れてしまいますが、養殖ものは逃げないので区別できます。

カジカ：青倉川にはものすごく生息します。一時、コンニャク排水が影響して、いなくなった時もありましたが、復活。石の裏に産卵するので、他の魚などに食べられません。放流はしてなく、骨酒がおいしい。

ハヤ(ウグイ)：近年増えています。青倉川に生息しています。冬に取る“寒ばえ”がおいしく、正月の吸い物にします。

マス(ニジマス)：年2回、成魚放流。魚は新潟から来ています。川では産卵孵化していないと思われます。放流した魚のほとんどは釣られていると思われます。放流して最初に子ども優占で釣り体験イベントをしたりすると、大人の釣り人に文句を言われることもありました。

ウナギ：青倉川に2年に1回、10kgを放流しています。

コイ：道平川ダム湖を作った時に放流しました。今では1mくらいのももいます。コイは猛獣で、なんでも食べ、水草を食べつくすなど、悪いことをしています。水がきれいで、ここのコイはおいしいとの評判。遠方の釣り客が来ています。

ヘラブナ：道平川ダム湖に放流しなかったが、今は生息します。だれかが入れたと思われます。遠方の釣り客が来ています。

ワカサギ：道平川ダム湖に4月、北海道網走から卵1000万

mを取り寄せて放流。網を二重に重ねて、竹に卵をつけて水中につけておきます。放流はとれた年のみで、毎年ではありません。食べるとおいしい魚で、ダムで生まれた“じねんじょ”は特に美味とのこと。

アユ：群馬県水産試験所で卵をとり、1~1.5cmのを業者が買って飼育し、4~5cmになったものを漁協が2500万円買って放流しています。放流した場所には、川の上にテープを張っています。カワウの食害防止のため。この綱張が大変な作業で、4、5日作業にでています。6月1日解禁。友釣りのおとりは1匹700円で売りますが、仕入れて死んでしまうものもあり、たいへん。おとり販売は現在、鎗川では今井さん1人のみ。ガマツカのテスターの言葉では、全国50河川のアユの中で、鎗川のものは三本の指に入る品質とのこと。鎗川上流(西牧川)はよくなく、南牧川がすごくいいです。岐阜県の川もよく、流域に石灰岩があるところがいいらしい。川でとれた天然ものはおいしいけど、養殖ものは餌の関係で内臓が食べるのに不向きで、味が落ちます。

3 将来の希望

魚を1匹でも多く放し、禁漁区を設けて管理を強化して、魚が多くいて釣りが楽しめる川を維持していきたい。そのためには、漁協だけの努力ではできないこともあり、自治体等の協力も必要な場面があります。

【9】中村成孝(環境省森林セラピスト)「街なかで森林浴」

下仁田の昭和レトロな市街地でのセラピー体験

2025(令和7)年9月20日(土) 午前中

森林セラピーとは、科学的に癒しの効果が証明された森林浴です。心身に具体的な癒しや健康増進の効果をもたらすことを目的としています。今回は公認の森林セラピストの中村先生のご指導のもと、認定コースではない下仁田町のまちなかで「森林セラピー体験」をおこないました。普段、ジオパークで案内している川辺や公園が、じつは素晴らしい森林浴のコースであることを実感できました。

1 諏訪神社下の鎗川河岸(下仁田層の見学地)

深呼吸をする、川のせせらぎの音、木々の香りを体感することで、ストレス軽減や免疫力向上の効果がります。五感を働かせることで、交感神経と副交感神経が機能します。

2 下仁田の街並み

明治~昭和から続く下仁田町の大通りの街並み、商店の歩み、歴史を楽しむことも癒しにつながります。

3 吉崎公園

青岩公園から古い石の階段を上り慰霊碑のある高台の吉崎公園からは、街全体が見渡せます。大崩山のどこか1点を決めて1分間眺めた後、目をつぶって瞑想する、という森林セラピー体験の実践をしました。普段とは違ったゆったりとした気分が味わえました。

4 野村丑之介の墓

下仁田戦争の爪痕は、下仁田の街の歴史上、大変大きな出来事でした。こういった昔をしのび旧跡を訪ねるウォーキングは、安らかな心持ちを持つことができます。

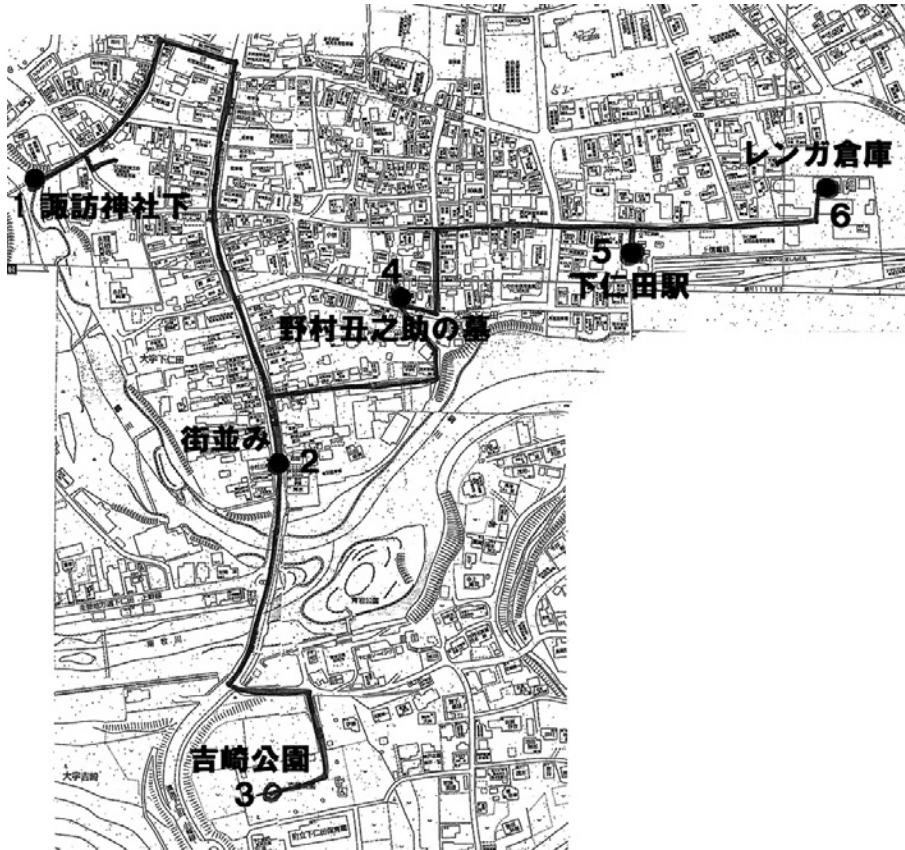
5 下仁田駅

関東の駅100選にも選ばれた、趣きを残す下仁田駅の駅

舎。上信電鉄の歴史、駅前から続くかつては歓楽街だった狭い中央通りは、昭和の風情が色濃く残ります。

6 レンガ倉庫と民芸品店

大正の建物とこの地域のものを含む古い民芸品を眺めることで、精神的な安定が得られます。



第1図 2025年9月20日「街なかで森林浴」コース